石川達三

新潮社版

悪女の手記

昭和三十一年十一月二十六日　印刷
昭和三十一年十一月三十日　発行

定価　二百二十円
地方売価　二百三十円

著者　石川達三
発行者　佐藤亮一　東京都新宿区矢来町七一
印刷者　長久保慶一　東京都新宿区市谷加賀町一ノ十二
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　神田加藤製本所
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京三四局代表七一一一—八
振替東京八〇八番

乱丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。
© by T. Ishikawa 1956, Tokyo

悪女の手記

裝

幀

小

堀

進

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

1

水沢先生――

先日はわざわざお訪ね下さって、有難う存じました。折角わたしの為に弁護して下さるというのに、御好意を無にして、何ひとつ打ちあけたお話もしないで、失礼いたしました。でも、正直なところ私にとっては、裁判などはもうどうでも宜しいのです。どうせ私が無罪になることはないでしょうし、あの人が有罪になる筈もないのです。それに、先生の弁護のおかげで罪を少しでも軽くしてもらいたいなぞという料簡は、私にはございません。却って、無期懲役にでも何にでもしてもらいたい位です。

一昨日、表記のところへ転居して参りました。母も子供も一緒です。こゝは武蔵野のどん詰りの、尾花が白く風になびく、ほんとに淋しい野末です。敗残の女の、五尺の身を横たえるには、むしろふさわしい所かも知れません。転居した私を追いかけるようにして、先生からの御手紙が、きのう、こちらに配達されて参りました。御親切なおこゝろ尽し、感謝に耐えません。この世のなかに、こんなに親切な人が居たのかしらと、驚いたくらいです。けれども、それももう手遅れではないでしょうか。もしも五年まえに、先生が私に

対してこれだけの深いお気持をもっていて下さったならば、私の境遇はずいぶん変って居ただろうと思います。

いまさら、先生にむかって何も文句を言う気はありませんし、昔のことを持ち出して嫌味をならべるつもりもございません。本当を申しますと、先生が何と言われようと、弁護などは一切してもらいたくないと思って居りました。打ちあけたお話をしなかったのも、その為でした。しかし昨日のお手紙を拝見してから、少しばかり考えが変りました。

私の本当の気持は、誰も知りません。裁判所の判事検事は勿論のこと、母も友人も、誰ひとり知っては居ないのです。従って私の犯した罪の由来も、知っている人は無いのです。私はそれでちっとも構いません。知ってもらったところで、どうなるものでもないのですから。

たゞ、私の子供が、今から十何年ののち、自分の母のことを身にしみて考えるようになった時、その母がなぜ罪を犯したか、母がどんな死に方をしたか、それを知りたいに違いないし、知った時に、どんなにか絶望的な暗い気持におちいるに違いない。それを思うと私は、この子の為に、母の本当の気持を、何とかして知らせてやりたいという気になるのです。それは母としての、私の義務です。この子のために何ひとつしてやる事の出来なかった私の、せめてもの義務だろうと思います。

さらに願いを罩めて、私は自分の手記を綴って見ようと思い立ちました。これは私の弁護をして頂くための資料ではございません。従って、公開されることは一切おことわり申します。たゞ先生にだけ御覧いたゞいて、ずっと先になってから、必要な時に、信彦に教えてやって頂きたいのです。先生は御親切なおかたですから、きっとそれ位の事はして下さるでしょうし、またそれくらいの（義務）は感じていらっしゃるだろうと、信じて居ります。

五年の歳月が過ぎたあと、いまあなたの事を先生とお呼びしなければならない、この不思議な境遇の変化は、何かしら皮肉です。本当を言うと、あなたは知らん顔をして、御自分の依頼されたお仕事だけをして居れば、それでよかったのです。私の事になぞ、かゝわりを持たない方が悧巧でした。あなたはいま、もしかしたら私を救ってやろうなどという、殊勝な、或いは思い上った気持をもっていらっしゃるかもしれません。ちょうどトルストイの「復活」のなかで、ネフリュードフ伯爵がカチューシャを救おうと努力したように。しかし、ネフリュードフがカチューシャを救うことが出来なかったように、あなただって私を救うことは出来ないでしょう。法廷に立てばあなたは立派な弁護士さんでしょうけれど、救われなければならないのは、あなた御自身の方かも知れません。私はもう、夙っくに救われて居りますわ。私は私なりの救いを、自分で見つけ出して居りますから、そ

んな御心配は御無用に願います。皮肉な言い方かもしれませんが、頼まれもしないのにあなたが、私を助けようと努力なさる、その事が、あなたがまだ救われて居ない証拠だろうと思います。

もう、こんな意地のわるい言い方はやめましょう。さて、どういう順序で私のことを書いたら宜いでしょうか。弁護士をしていらっしゃると、沢山の罪人を毎日御覧になることと思います。そして、どんな罪人も、その罪を犯すまでには、沢山の沢山の原因が積みかさなって来て、のっぴきならない羽目におちて、罪を犯すよりほか道がないような事になって、始めて罪を犯すものだということを、御承知だろうと思います。

だから私の犯した罪も、私の育てられた環境のせいだとか、社会の罪だとか、そんな弁明をしようというのではありませんが、やはり私には私なりの、どうにもならない原因の積み重ねがあったのだという事だけは、知っておいて下さい。私は父を知らない娘でした。父が誰であるかは知って居ります。立派な学者でした。後には学士院会員となり天皇陛下の御前講演もしたことがありました。そういう父の社会的名誉をまもるために、私の母とのあいだの情事は一切闇に葬られ、私は私生児として母ひとりの手で育てられたのです。

立派な学者というものはそういうものなのでしょうか。母は若い身空で私生児をかゝえ

て、世間の批難をひとり切りで耐えて、生きて来たのでした。そして父は唯の一度も、世間の批難を浴びたり肩身せまい思いをしたりしたことはないのです。私の母は、その為に生涯独身ですごさなくてはなりませんでした。青春期の或るひとつの過去が、母にとっては生涯の軛となって逃れられない苦難を背負わされるものであったのに、父にとってその同じ過失が、何のマイナスにもなっては居ないのです。

水沢先生……あなたはこういう私の出生の秘密を御存じなかったろうと思います。たとえ御存じであったとしても、あなたにとっては何でもない事であったでしょう。しかし私にして見れば、そこに先ず私の背負わされた（運命）の第一歩があったのです。いま私が裁きを受けている私の罪は、遠く辿って行けばこの事件に突き当るのです。私の父が、自分勝手な愛欲にふけった果てに、私の母を棄て去って省みなかった、その父に対する私の怒りは、肉腫のような固いしこりとなって私の心に残って居りました。

私があのような罪を犯した時にも、私の心のなかであの男は、私の敵であると同時に、私の母の敵でもありました。父に対する私の怒りをも罩めて、二重の怒りになって、私に激しい行動をさせたのでした。裁判所というところはお役所であって、固苦しい考え方しか出来ない判事さんが、六法全書に書いてある刑法第何条とやらで定められた通りの裁判をすることしか知らないらしいですから、二十八年もの昔に或る一人の学者が、或る一人

の娘と親しくなって妊娠させたという事柄を、いまさららしく引っぱり出してみても、その事と私の罪とのあいだには何の関係も認められないと言われるに違いないのです。

けれども、これは真実なのです。私の父の不法な行為がなければ、私の母はもっと仕合せな生涯を送って来たでしょうし、私もまた、もっと素直な娘に育てられて、もっと常識的なおとなしい生活をしていたに違いないのです。しかもいま、私は処罰されるというのに、父は赫々たる名誉に飾られた学界の長老であるのです。罪は女だけに着せられて、男たちはすべて許されているのです。私は被告席に坐らされているのに、私の相手のあの男は証人台に立っているのです。そしてもう一人のひと、水沢省三さんという人は堂々と弁護士席についていらっしゃるのです。一体誰が本当の罪人なのでしょうか。裁判所というところは、何か根本的に間違っているのではないかという気が致します。

母は若いとき、大学の図書館につとめて居りました。朝から晩まで、若い学生たちを相手にして、書庫のなかから希望の本をさがし出しては貸してあげる、いそがしい仕事でした。自分の勉強に立ちむかった時の学生たちの、真剣な青く冴えた眼にとりかこまれて、張りあいのある、良い職場であったらしいのです。父はその大学で、若い助教授でした。図書館のなかの研究室にこもって、何百冊の本に埋もれて、毎日勉強している父の姿が、若い母の眼に美しく見えない筈はありません。学生たちの未熟な、どこかしら精神の均り

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

あいのとれない、ぎらぎらした悧巧さと違って、もはや家庭をもち、三十を幾つか過ぎて、ちょうど男の完成した円満な姿に近づきつゝあった父の存在が、学生たちと比べてずっと立派に見えたことは、当然であったろうと思います。

その頃父は、博士論文を書くために毎日のように図書館にこもって居たらしいのです。そしてそれがまた、母と父とが接近する機会にもなったのでした。いつの間にか母は、この若い助教授が立派な論文を書いてくれることをひそかに念願し、早く博士号をとれるようにと祈る気持になって居たのでした。夜の九時に図書館は閉鎖されます。助教授はその時になってようやく勉強を切りあげ、疲れた頭を重そうに本の上から持ちあげて、夜の街を帰って行くのでした。そして母も、一日の仕事を終って裏口から外に出ます。自然に帰り道が一緒になることがあり、それが度重なるようになったらしいのです。そういう母の在り方を、責めることが出来ましょうか。父がすでに妻帯していることは知っていたにしても、若い女としては極めて自然な心のかたむきではなかったでしょうか。

つゝましい二人の交際は、ほゞ一年も続いたもののようです。いくらつゝましい交際ではあっても、人眼の多い図書館のことですから、やがては人の口の端にものぼるようになったに違いありません。父の先輩である大学の学長が、父のために心配して、人の噂を封ずる為と、父の身の安全を図るためとで、博士論文が大学に提出されるとすぐに、父を京

都の大学に、若手の教授として転任させるように計らって下さったのでした。

これは一体どういう事でしょうか。学長さんの処置は、多分世間では賢明な、思いやりのある、立派な計らいであったと言われたに違いないのです。しかしその賢明な処置というのは、助教授たる父のためだけに良いのであって、母のためには誠に無慚な、何ひとつ思いやりのない、冷酷な計らいであったのです。父が転任してから三カ月目に、母は図書館のつとめをやめさせられました。そして、そのとき母は、私を身ごもっていたのでした。

転任の勧告を受けた父は、学長の計らいに感謝して、京都の大学に（栄転）して行ってしまったのです。家族も一緒でした。母は気の弱い、おとなしい、むしろ古風な女でしたから、全くの泣き寝入りでした。父からは、手切れ金だか養育料だか知りませんが、いくらかまとまったお金が、たった一度送りとゞけられただけだったそうです。父には沢山の味方があって、父の名誉をまもり世間体をつくろってくれたらしいのですが、母には一人の味方もありませんでした。

私はそのようにして、見すてられた場所で、見すてられた女の私生児として、生れて来たのでした。私を育てた母は、その最初の経験に懲りて、終生を独身で過してまいりました。男を信じてはならない、男を頼ってはならないということが、その後の母の生涯を通

じての人生哲学でした。母は私ひとりを頼りにして、私の成長を唯一の楽しみにしていたのですが、その私が思春期をむかえることを、何よりも恐れていたものでした。母は私に良い配偶者をあたえたいと念願しながら、一方ではまた男に瞞されはしないかという恐怖にびくびくしていたものでした。

けれども私は、そういう母の恐れを、むしろ軽蔑していました。男に裏切られることを恐れてびくびくしているというのは、女に自主性がないからであり、自信がないからであり、男に頼って生きて行こうという横着な気持が根底にあるからだと思って居りました。私は自分で経済力をもって、働いて生きて行くつもりでした。瞞されたとか裏切られたとかいう女の悲劇は過去のもの、一時代まえのことだと考えて居りました。ですから男のなかに立ちまじって、どんな事でもやって来たものでした。母がはらはらするのを尻眼に見て、男友達と海へ行ったり、キャンプに行ったり、スキイにも山登りにも、どこへでも出かけて行って、何ひとつ間違いを仕出かしたことはありませんでした。

私は男性のなかの、一種不思議な性格を知って居ります。男は、弱々しい女、男を恐れてびくびくしているような女を見ると、何かしら誘惑を感ずるらしいのです。ちょうど蛇をもてあそんでいる猫が、蛇が隙を見て逃げようとすると、跳びかゝって捕え、蛇がじっとして居るあいだは、退屈そうに欠伸をしているあの猫のような性格です。男にはそうい

うけだもののような本能があるように思われます。

私は母の感情に反撥するような気持で、むしろ母の陥った不幸に挑戦するような気持で、積極的に男たちのあいだに立ち交り、恐れ気もなく振舞って居りましたが、すると男たちは私には何の興味をも見せないで、弱々しいみすぼらしい、自信のなさそうな女に接近してゆき、婚約を結んだり同棲したり、二人きりの秘密な交際をたのしんだりして居たものでした。

その事によって私はどれだけ自信を失ったか知れません。私はそれほどまでに魅力のない娘なのかと絶望的になったり、わざと乱暴な振舞をして見たりしたものでした。私よりも美しくない、私よりも悧巧でもない、そして魅力の乏しい退屈な娘たちが、次から次へと愛人ができて、何とか纏って行くのです。それを見ているのは何とも言えない悲しいものでした。もしかしたら私が父のない娘であることを人が知っていて、その為に私を避けているのかも知れないと、ひがんで考えたこともありました。

今から考えて見れば、それは何でもない事でした。男たちは手に取り易い女を選ぶのです。簡単に手に入れられる獲物を、急いでつかまえてしまうのです。そして、女が弱々しい姿を見せたり、男を怖れているような態度を示したりすることは、それ自体が男を誘惑する手段であったのです。女は本能的に男の性格を知っていて、そういう男を誘惑するた

めに、弱々しい素振りをして見せるのでした。

私は愚かにも、そうした女の本能をどこかに置き忘れて生れて来たものらしく、男友達の前で弱々しい姿を見せることが出来ませんでした。或いはまた、母が口癖に言う男のあぶなさということが頭にしみついて居たために、男に負けまいという警戒心ばかりが異常に発達していたのかも知れません。私は山の宿で、わざと男友達と雑魚寝したこともあります。男ひとりのアパートの部屋に泊り込んで、二人きりで一夜を過したこともあります。しかし青年たちは私のなかから、何かしら危険なものを直感していたらしく、私には何の危害をも加えませんでした。

そのことを誇りに思いながら、しかも私はその事に何とも言えない絶望を感じていました。私だって誘惑されたい、私だって危険な目にあわされてみたい、抵抗できないような強い力で征服されてみたい。そういう願いをひそかに胸に抱きながら、一方では男たちに一指も触れさせない自分の強さを誇りに思ったりもしたものでした。

水沢先生……あなたはそういう私の内密な気持も御存じなく、不用意に私に近づいて来られました。あなたは真面目な学生でしたから、多分女友達もあまり無かったことでしょう。あなたは最初、愛人としてではなく、全く男友達と同じような一人の友達として、私に接近して来られたようでした。

「河合君……」と、あなたは男友達を呼ぶような言い方をなさったものでした。「……僕は君に会ってはじめて、尊敬すべき女性を発見したよ。君はめそめそしない。それから余計な感情でもって理窟を歪めない。その点、本当に敬服するよ。君のような女友達は本当に楽しい。安心してどんな議論でも出来るし、いくら議論しても、あとがさっぱりしているから良いね」

「その代り魅力も無いわね」と私は言ったものでした。実は、その言い方は一種の賭けでした。あなたが何と答えるか。それによってあなたの私に対する正直な評価が聞けるだろうと思ったのです。したがってあなたのお返事を聞くことは最大の恐怖でもありました。

「魅力？……どんな魅力だね。魅力と言ってもいろいろ有るからね。やたらと女性のセックスをひけらかしたような、しなしなした魅力、下劣な魅力もあるだろうし、魂の底光りが自然に現われて来たような高貴な魅力もあるだろうしね。だからさ、魅力なんてことを気にするのは君らしくないよ。君には君の、ちゃんとした魅力があるんだ。坂本君や下村君みたいな、あんな平凡なもんじゃなしに、もっと近代的な女性の何かが有るじゃないか」

もう六年以上、七年ちかくも昔のはなしですが、あの時の先生のお言葉を、私はいま以って忘れられないのです。あれは銀座で映画を見たあと、六丁目の角の喫茶店で散々議論をして、それから帰りかけた数寄屋橋の裏手の、ほの暗い横町での会話でした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.